

通説にとらわれず、史料との対話を通じて前近代中国の実態を追究

Navigator

文学部 / 東洋史学専攻

阿部 幸信 教授

Yukinobu Abe

阿部 幸信 (あべ ゆきのぶ)

1972年、東京都生まれ。東京都立調布北高校卒業。東京大学文学部歴史文化学科卒業。東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻博士課程修了。福岡教育大学教育学部助教授、日本女子大学文学部准教授等を経て2009年より現職。

規範への疑問から、中国前近代の支配・被支配関係に着目

阿部先生は、東洋史の中でも中国前近代（主に戦国〜魏晉南北朝）を専門にしている。この選択には、先生ならではの理由があった。先生は中学や高校時代、周囲が当たり前のように入っている「学年が上ならば無条件で敬わなければならない」という規範が納得できない生徒だったそうだ。こうした規範は、さかのぼれば孔子を祖とする儒教に基づくものである。そして儒教は漢の時代（紀元前2〜後3世紀）に中国社会に浸透していったとされる。「儒教に限らず、中国前近代の文化は多様な面で日本の社会や価値観に強く作用しました。その影響は現代にまで及んでいる。今の日本のいろいろな事象を見通せると考え、この時代を専門に定めたのです」

先生が特に関心を抱いたのは、この時代において人間同士が支配する・される関係がどのような状況だったのか。「皇帝支配を長期にわたって安定させるのに成功したのは、後に高祖となる劉邦とその一派が建国した漢王朝です。ここで確立された皇帝制度は最終的に専制支配（君主の意志に基づく統治）に行き着きますが、最初から誰もが「皇帝は無条件に偉い」と思っていたはずはないし、社会の末端にまでその支配力が浸透していたとも考えられない。萌芽期の皇帝制度の様相はどんなもの

だったのか、疑問を持ったことが研究の始まりとなりました」

大学の卒業研究のテーマは「漢〜魏晉南北朝期において、支配階層の人々が身に付けていた公的な衣服の制度」。当時の支配階層の人々の上下関係がどのような状況だったのかを衣服制度から考察する、というものだ。先行研究が少ないため、やればやるほど発見があつて先生は研究にのめり込んでいった。その結果、研究者としての道を歩むこととなり、公的な衣服制度を切り口に「支配―被支配」の関係を追及する、という研究を先生は現在に至るまで続けている。

史料に真摯に向き合い、時代の状況を再現していく

この研究は先述の通り先行研究が少ないため、史料選びには手間をかけることになった。前漢武帝期（前2世紀末ごろ）までの歴史書としては有名な『史記』があるが、『史記』を引き継ぐ『漢書』『後漢書』は同時代的な記録ではないため、記述内容が実態とは異なっている可能性もある。断片的な出土史料も存在するが、すべての時期をカバーできるほどまよばんなくあるわけではない。

そこで先生は『史記』とともに、各時期の学者が残した史料を積極的に研究に活用していった。それも、書かれていることをただ読んだのではない。史料の向こう側にいる人々の心情を推測し、彼らが生きている時代の状況をイメージして、それを

自分なりに再現する。まさに、時代とコミュニケーションを図るような姿勢で研究を進めたのだ。やがて、面白いことがわかってきた。「人間は生まれながらにして偉いわけではない。身分にふさわしい格好をしていないと、地位ある者だと見分けがつかない。支配階層はそれなりの格好をしていなければいけない」と学者たちが考えていたことが浮かび上がってきました。彼らは、秩序を安定させるために衣服制度を確立しなければならぬと主張したのです」

漢の建国当時は、劉邦（初代皇帝・高祖）とその一派が人望によって人々を支配していた。しかし、支配階層が代替わりしていけば、それだけでは人々は従わなくなっていく。そのため彼らは、体制維持のために衣服制度などの規範を確立していった。そして儒教の影響が強まるとともに、身分が上の人を敬うという考え方が100年ほどの時間をかけて浸透していった、ということが実情に近いのではないか、という考察に先生は至った。

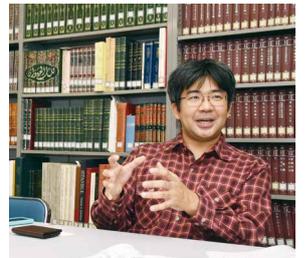


先生の共著。左は、近年中国で数多く発見されている出土史料を幅広く紹介するもの。

**中国の特性を意識しながら
前近代の様子を読み解く**

「わざわざ規範を確立する必要があったということは、中国という国を考える上で重要なポイントです。私たちは中国について、儒教の影響が社会や文化の隅々にまで及んでいる」と考えがちですし、前近代に関しては「身分が高い相手に対しては絶対服従の風潮があった」というイメージがある。けれど中国の人々の多くは支配に対して決して従順ではありませんし、画一的に支配されていたという割には各地の地域性が根強く存在します。中国では2000年以上にわたって一貫して皇帝制度による専制政治が行われてきたという言説がこれまで主流でしたが、史料から当時の中国社会や人々の姿を探っていくと、とてもではありませんが皆が専制支配を心底受け入れていたとは思えません」

歴史に向き合う際、結果から価値判断を下すことは注意して慎まなければならぬ、と先生は言う。「皇帝制度について言えば、それが専制政治につながったことを後世の私たちは知っていますから、支配者が「皇帝」という称号を用いたら直ちに専制支配が完成したと思ってしまう。しかし、物事はそれほど単純ではありません。確かに前近代において衣服制度などを通じて規範が維持され人々はそれに従いましたが、一方で中国社会には、どんな秩序もいつ引



「歴史とは現代社会の内側にあるもの」と言う先生。どんな視点からでもアプローチできると考え、授業ではライトノベルやゲームを教材に活用することも。

つくり返してもおかしくない、という意識が脈々と息づいてきた。また、地域ごとに多様な社会が形成されていて、支配者が一律統治することは難しい。中国とはそういったダイナミズムをはらむ国であることを前提に考えないと、実情に合わない理解をしてしまう可能性があるのです」

そう考えると、日本に根付いている儒教的価値観にも新たな見方が生まれる、と先生は語る。「中国とは異なり、日本社会には身分階層の流動性がない。それなのに儒教的な価値観が温存されていることが、さまざまな状況で窮屈さを感じる原因となっているのだろう、と解釈しています」

**歴史とどう向き合うかは
どんな生き方を選ぶかに通じる**

歴史学は史料を読み解いて事実を明らかにするための学問ではない、というのが先生の考えだ。「確かに物事が明らかにすることはとても大切ですが、それで終わらせては意味がない。儒教の例からもわかるように、過去の人々の考えや行動は、現代を生きる私たちにまで影響を及ぼ

しています。明らかになった事柄を通して歴史をどう解釈し、向き合っていくか。自分なりに考え、その答えを「今」を生き、これから「つくる糧」とすることが、歴史学を学ぶ上で一番重要な点だと思えます」

歴史をどう解釈するか。それは「自分はどう生きるか」の選択につながる、と先生は語る。「現在、文化や社会のグローバル化が進む一方で、各国でナショナリズムが高まっている傾向が見られます。けれど、歴史的に「国家」という概念が確立したのは近代のこと。それ以前の時代、人々は「自分はどの国の国民である」という意識などもたずに暮らし、交流していました。自国の歴史、また自国と他国との関わりを踏まえて視野のバランスを図る姿勢が大切です」先生は学生の指導に当たる際、自身の歴史の観方を真摯に示すことを心掛けています。

時には学生たちが視野を広げられるよう、通説として語られているとは異なる視点を提示することもあるという。バランスの取れた、偏りのない観方で歴史の考察ができるようになってほしい。それが先生の思いだ。「また、人の言うことばかりに頼らず、根拠を明確にしながら自分なりの意見を主張する姿勢を身に付けてほしい。そのために、ハードルの高い課題にも逃げずに立ち向かって、強靱な知性と感性を育ててほしいと願っています」

先生にとっての「特別な一冊、は？」

『吉里吉里人』井上ひさし（新潮文庫）
中学1年生の時に読んで、現代社会のありようについて深く考えさせられると同時に、常識を疑うことの重要性を教えられました。

高校生へメッセージ

自由な発想を大事にしてください。先入観や偏見をふりほどいて、まずは何事も試してみましょう。



先生の幅広い視野を表すような、バリエーションに富んだラインナップ。



中国の友人にも勧めたという一冊。ハッピーエンドではない、含蓄に富んだ結末がたまらない、とのこと。

どんな高校生でしたか？

部活（コーラス部）のために登校していたようなものです。我ながら、不真面目な生徒だったと思います。

高校生の頃の夢は？

作曲家。合唱曲や吹奏楽曲を書いていました。

お薦めの本を3冊あげてください

- 『環境から解く古代中国』
原宗子（大修館書店）

政治史・社会経済史一辺倒の教科書的な観方が、これでもかというくらいに壊れていくのを実感できます。

- 『夢十夜』
夏目漱石（新潮文庫）

名文に酔い、情緒にしばれたあと、そこで鋭く問われている「近代」というものを考えてみてください。歴史学の本質にも漱石は触れています。

- 『ふたつのスピカ』
柳沼行（メディアファクトリー）

皆さんには、主人公・アスミのように、一個の自立した人間として生きるための強靱な知性と心を身に付けてほしいと願っています。



現在の研究テーマを教えてください

中国前近代（主に戦国～魏晉南北朝）の君臣関係・政治思想が中心です。人間同士がどのように結びつき、支配—被支配の関係を生み出していったのかに興味があります。人々を取り巻く自然環境・社会環境にも関心があり、例えば三国時代の農業生産と気候変動の関係や、「右側」「左側」をめぐる価値観の変遷などについても考察しています。

ご趣味は？

多趣味ですが、授業でよく話題にするのは以下です。(1) 園芸。ただし、食べられるもの（果樹・野菜）に限る。(2) マンガ、アニメ、ゲーム全般。東洋史学専攻のサブカル担当を自称。(3) 食べ歩き。とりわけ、辛いものと甘いもの。